

【書き下し文】

陳述古密直、建州浦城県に知たりし日、人の物を失ふもの有り。捕へ得るも、的かに盗を為す者を知る莫し。述古乃ち之を給きて曰く、「某廟に一鐘有り、能く盗を弁ちて至靈なり」と。人をして迎へて後閣に置かしめて、之を祠る。群囚を引きて鐘前に立ち、自ら陳ぶ。「盗を為さざる者之を摸づれば、則ち声無し。盗を為す者之を摸づれば、則ち声有り」と。述古自ら同職を率ゐて鐘に禱ること甚だ肅たり。祭り訖りて帷を以て之を帷らす。乃ち陰かに人をして墨を以て鐘に塗らしむ。良久しくして囚を引き、逐一手を引きて帷に入り之を摸でしむ。出づれば乃ち其の手を驗す。皆墨有り。唯だ一囚の墨無き者有り。之に訊ふに、遂に盗を為すを承く。蓋し鐘の声有るを恐れて敢えて摸でざるなり。

【現代語訳】

陳述古密直が、建州浦城県の知事であったとき、物を失った者がいた。(容疑者を複数)捕らえたが、実際に盗んだ者を明らかにすることができなかつた。述古は、これらの容疑者たちをだまして言うには、「ある廟に鐘が一つある。(その鐘は)盗人を見分けることができて靈驗あらたかなものである」と。人に取りに行かせて奥の部屋に持って行かせて祭っておいた。容疑者たちを引き連れて鐘の前に立ち、自分で述べた。「盗みをしていない者が鐘を撫でると音が鳴らない。盗みをした者が撫でると音が鳴るのだ」と、述古は自ら同僚を率いて鐘に厳肅に祈りを捧げた。祈りが終わると垂れ幕で鐘のまわりを囲んだ。また、ひそかに人に命じて墨を鐘に塗らせた。しばらくして容疑者たちを引き連れ、一人づつ手を引いて垂れ幕に入り、鐘を撫でさせた。垂れ幕から出てきた容疑者たちの手を試した。みんな墨がついていた。しかし、たった一人墨のついていない容疑者がいた。その者に問うと、遂に盗みをしたことを認めた。思うに鐘の音が鳴るのを恐れて撫でようとしなかつたのである。